

日本・チェコ藍染め交流

高校生による国際文化交流から考える

ヴィオルク 代表 小川 里枝

はじめに

本稿で使っている国際文化交流の「文化」と家庭科はどのように関係づけられるのでしょうか。本稿における「文化」とは、必ずしも狭い意味での芸術文化だけをさすものではありません。国際文化交流における文化の対象は、伝統文化から現代文化に至るまで広範囲にわたっています。例を挙げれば、能や狂言、歌舞伎などの伝統芸能や雅楽、琴や三味線などの邦楽、柔道や空手などの武道、茶道や華道、美術工芸や文学、映画、さらにはマンガ、アニメーション、ゲーム、ポップミュージックなど、私たちにも身近で、実際によく知っている分野も多いものです。そして私たちが普段から楽しんでいる料理やファッション、インテリアなどの衣食住の生活文化ももちろん、現代の国際文化交流において、文化の範疇としてとらえられています。

これから紹介する事例は、筆者が深くかかわることのできた藍染めを通じた国際文化交流です。主役となったのは、日本とチェコで、ともに古くから人々の生活に根差し、発展してきた藍染めの技術を学ぶ高校生で、異なる文化の中で発展したチェコの藍染めを自分たちの目で確かめてみたいという熱意を持った徳島の高校生たちと、その熱意を酌んだ先生たちからの働きかけによって実現したものです。

2000年以降、インターネットや飛躍的に広がったSNSによって、容易に多くの海外の情報に触れ、コミュニケーションできる時代になってきました。本稿では、すでに国際文化交流の歴史も古く、また人的交流の多いアジア諸国や欧米諸国と比べるとあまりなじみのない中央ヨーロッパのチェコ共和国で、デジタルの恩恵を受けながら、伝統を学び、現代に通じる新しさを作ってみるというプロセスを実行した日本とチェコの高校生たちの研修プロジェクトを通じ、これからの国際文化交流について考えてみたいと思います。

1. 戦後から現在の国際文化交流

まずは、戦後より現代まで、国際文化交流の変遷を簡単に追っていきましょう。戦後から1960年代までは、敗戦と占領を経た日本が、欧米を中心とする国際社会への復帰をめざして、経済復興を遂げた時代でした。この時代は、欧米に対し日本文化を紹介するという姿勢が強く、海外に向けては日本文化を、そして日本においては外国文化の紹介が主になっていました。

続いて、めざましい経済成長を遂げた後の1970年代から80年代は、アジア諸国との交流が盛んになります。事業の実施は、今まで政府機関が中心であったものが、国際文化交流の必要性が重視され、地方自治体の国際交流活動、やがて民間・草の根の国際交流活動も活発化しました。双方向の交流によって人々の間の相互理解が進むことが期待され、文化交流の「文化」も、前項で触れたように生活文化などを含む広い意味の「文化」に拡大する兆しが見えはじめた時期でした。

さらに冷戦体制崩壊後の1990年代以降は、グローバルな規模での国際交流が活発となってきました。国と国とのつながりという枠組みを超えて、広く日常的で頻繁な異文化接触が行われるようになりはじめました（参考：国際文化交流懇談会による「今後の国際文化交流の推進について」2003年）。

チェコ共和国は、1989年の民主化革命（「ビロード革命」）後、1993年1月、スロヴァキアとの分離、独立を経て誕生した国です。私事になりますが、筆者が奉職した群馬県高崎市では、チェコ共和国プルゼニュ市と1990年に姉妹都市関係がはじまりました（日本とチェコ共和国間でははじめて）。キリン高崎工場とプルゼニュ市のビール工場、プルゼニウスケー・プラズドロイ（ピルスナー・ウルケル）社との協力関係が前身としてあったことから実現しました。これは、地方自治体と産業界が共同で市民交流の道を開いたと振り返ることができ、その

後高崎市では、市民も参加する多角的な活動が行われました。そして21世紀となった現在では、次に紹介するように、国際文化交流の方法や担い手はさらなる広がりを見せています。

2. 事例の紹介 藍染めを通じた国際文化交流

2-1. プロジェクトのはじまり

今回紹介する交流事業を含む海外研修は、チェコ共和国モラヴィア地方のオレシュニツェ市とストラージュニツェ市で、2020年1月8日から10日にかけて行われました。この藍染めを通じての国際文化交流は、日本とチェコの間としては、はじめて行われたものです。チェコを訪れた徳島県立小松島西高等学校生活文化科には、全国的にも珍しい本格的な藍の染色施設（藍の館）があります。生徒たちは被服全般のほか、染を使った藍建てや絞りなどの染色技法を日々学んでいます。

徳島県教育委員会は、徳島ならではの先進的な体験・研究活動を支援し、地域創生や人材育成を図ることを目的とするスーパーオンリーワンハイスクール事業を行っていました（2022年まで）。今回の研修は、小松島西高校2年生の生徒たちが、この事業へ「伝統を守るから超えていく」をコンセプトとした取り組みを計画したことからはじまりました。具体的には、青木真理教諭（現在小松島西高校勝浦校所属）の指導で、畑でタデ藍を栽培して生葉染めの実験、さらにタデ藍から沈殿藍をつくる、ファッション造形等の授業で培った縫製技術を用い、自由な発想で藍染め作品を制作する課題に取り組み、伝統技法を学ぶと同時に、現代に生かす方法を考えました。

その過程でチェコ共和国に藍染めがあり、2018年にユネスコ無形文化遺産に指定されたことを知り、現地の藍染めを知りたいと希望するようになりました。筆者の主宰するヴィオルカは、小松島西高校からの要請を受け、チェコの藍染めについての事前学習会の実施や現地でのプログラムの提案のほか、現地の受け入れ可能な高等学校の選定、藍染め工房との交渉・連絡・調整など、コーディネート業務で研修旅行実現全般を支えました。

2-2. プロジェクトの内容

小松島西高校からの希望に沿って作成した研修プログラムの内容は、以下のとおりです。

- ・19世紀初頭から続く藍染め工房の訪問
- ・藍染め工房でチェコの伝統技術である木版による糊置きを体験し、作品制作を行う。
- ・現地の研究者からチェコにおける型染めの文様に関する講義を聴講する。
- ・現地高等専門学校被服学科の見学、教室や現地の生徒たちが作った作品を見ながら意見交換をする。
- ・阿波藍についてのプレゼンテーションを行い、阿波藍の広報をする。
- ・沈殿藍を使った藍建てのデモンストレーションと現地高校生との絞りと染めのワークショップを行う。

このほか、チェコ側の校長より生徒たちからの強い希望があるということで、急遽、校舎の大教室で生徒の交流会「日本とチェコの夕べ」が開催されました（写真①～⑦参照）。



写真① 19世紀初頭から続く藍染め工房を見学し、職人から話を聞いた。 Photo: Danzinger



写真② 藍染め工房での講習の様子、職人の手ほどきで木版を使った糊置きを体験した。 Photo: Worick-foto



写真③ 藍染め工房での講習の様子，作品作りに取り組んだ。 Photo：筆者提供



写真⑥ 絞りと染めのワークショップの様子，染め上がり Photo：Worick-foto



写真④ 絞りと染めのワークショップの様子，手ぬぐいを使った絞り技法の実践 Photo：Worick-foto



写真⑦ 絞りと染めのワークショップの様子，終了の際には，自然にハグがはじまった。 Photo：Worick-foto



写真⑤ 絞りと染めのワークショップの様子，藍の染液に手ぬぐいを浸ける。 Photo：Worick-foto

帰国後，生徒たちは，研修の成果をまとめ，2020年2月1日に行われたスーパーオンリーワンハイスクール事業の生徒活動発表会に臨みました。そこでこの研修内容が高く評価され，見事に最優秀賞を受賞しました。残念ながら，その後はコロナ禍

のため，交流の続行が大きく制限されてしまいましたが，2022年2月には青木先生が中心となり，現地の高校とのオンライン交流を行い，後輩たちにチェコでの研修の経験を伝えています。

3. 成果とその意義

3-1. 現地の交流で得られたものとは

ここでは，前項で紹介した研修の成果から，その意義について考えてみたいと思います。研修最終日に行われ，両国の学生が交流する研修のハイライトとなったのは，生徒たちがつくり，チェコに持参した沈殿藍を使った藍建てのデモンストレーションと絞りと染めのワークショップでした。実は研修コーディネーターとして一番心配したことが，果たしてチェコでこの藍建てがうまく行くであろうかということでした。藍建てはとてもデリケートな作業です。引率の青木先生とこの研修が行われた工房の職人とを結び，日本から持ち込めない藍建てに必要な

用具や材料等を準備してもらったほか、手順の確認を繰り返しました。その綿密な準備が功を奏し、本番では、とてもよく藍が建ちました。

そして小松島西高校の生徒たちは、現地の高校生に絞りの技法と藍の染液につけて空気にさらすという作業を手取り足取り教えました。ものづくりに取り組む者同士がお互いに打ち解け、工房の中には心地よい空気が溢れていました。その空気を感じたその時、私はこの交流は大成功だなと感じました。一つひとつのプログラムの準備を丁寧に重ねたことが、先生方、生徒たち、そして工房の人たち、チェコの関係者のみなさんすべての心を大きく動かし、研修を成功に導いたと思います。

このような結果を得ることができたのは、小松島西高校前校長の寺奥敦子先生をはじめとする家庭科の先生方や、藍染めの先生（現代の名工・古庄紀治氏）の指導によるところが大きいと考えます。そして、生徒たちが徳島県を代表する伝統の技術である藍染めと模様を表現する絞りの技法を身につけ、チェコの同世代の生徒たちに教えることができるまでに高めていたことも大きな要素でした。この経験によって、自分たちの身近にある日本の伝統文化や日本というものを再認識することができたのではないかと感じます。

海外に滞在することで、自分のアイデンティティーを意識し、それを見直してみるべきだと気づく人はたくさんいます。外からの目を自分の中に持つことができることで、今まで気づけなかった自分の国や住む地域の良さをあらためて知ることができるのです。子ども時代から青年期まで、感受性の豊かな頃からの経験があれば、その後はどこにいても視野を外に広げることができるのではないのでしょうか。研修に参加した生徒のうちのひとりには、国際コミュニケーションを学ぶために進学しました。

3-2. 現地の交流が残したものは

また、この研修は、現地のテレビ（チェコ国営テレビ文化ニュース）のほか、ラジオ、日刊紙等の記事に取り上げられ、多くのチェコの人々に知られることとなりました。外からのまなざしという点では、チェコの人にとっても自分たちの伝統である藍染めを見直す機会となったのではないかと考えます。わざわざ遠く離れた日本から藍染めの勉強をしに来る高校生たちがいるというニュースは、とてもインパクトのあるものだったに違いありません。海外の



写真⑧ 「藍染めを使った日本の衣装」2020-2021年、ストラージュニツェ高等専門学校3年生だったクリスティーナ・シャンデロヴァーとアドリアーン・ルカーチュによる課題作品 Photo：ストラージュニツェ高等専門学校提供

人々から評価されることによって自国の文化が再発見されるということも世界中で少なからず起こっていることです。現在、チェコの藍染め職人は数えるほどに減っており、藍染め工房、研究者や美術館、博物館関係者によって、忘れられてはならない技として、継承の大切さが熱心に説かれています。

伝統技法に対する若い世代の興味関心が広く知られたことも大切なことだったと思います。ワークショップに参加したストラージュニツェ高等専門学校の生徒のうちのふたりが、ワークショップに参加したのち、「藍染めを使った日本の衣装」という作品に1年かけて取り組み、全国の高等専門学校生の制作した優れた作品を選ぶ全国コンクール（チェコ共和国文部省主催）の最優秀賞を受賞しました。その作品は日本の着物と帯を模したもので（写真⑧参照）、帯にオリジナル文様を使った藍染めを使っています。これに続く後輩たちも、こうしたオリジナルの文様をデザインし、現代のモードに呼応する作品を制作し、2023年には全国学生デザイン賞の高校部門で最優秀賞を受賞するなど、藍染めの伝統に新たな風を吹き込むようになっています。

このように、両国の藍染めにかかわる人たち双方に影響がみられたことにも、この研修の大きな意義が見いだせるのではないのでしょうか。また訪れた先々で、心からの温かい歓迎をいただきました。生

徒たちの心には、きっといつまでも忘れられない思い出として残り続けると思います。こういった経験がチェコだけでなく、多くの国々の間で積み重ねられてゆけば、日本と諸外国間の大きな財産になるでしょう。

4. まとめ

徳島県とチェコの高校生による藍染めを通じた交流からは、多くの気づきが得られたと思います。まず、何よりも若い世代に海外の文化に直接触れ、交流を持ってもらうことの大切さです。特に青年期からの国際文化交流の体験によって、自国の文化に好奇心を抱き、地域の伝統文化の担い手が育つことになれば、今後も継続的にありのままの日本の文化を世界中に伝えることが可能になるでしょう。

また「外からの目」で地域の新しい文化資源を発見して、活用するようになることも可能になるのではないのでしょうか。国際文化交流に携わる人材が増えることによって、よりきめの細かい交流を相互に積み重ねることもできるでしょう。それは、一人ひとりが互いを理解し、心豊かに生きることにつながります。

今後も日本と多くの国との間で、有意義な国際文化交流が続けられるよう、多方面からの協力や支援が望まれます。筆者もさらにさまざまな文化交流事業へ寄与できればと考えています。

【参考】

●チェコ共和国について

チェコ共和国は、1918年、オーストリア・ハンガリー帝国崩壊後、スロヴァキアとともにチェコスロヴァキア共和国として独立し、39年のドイツ占領と解放を経て、48年に社会主義国へ、89年共産体制から民主化を実現させたのちの93年、スロヴァキアと平和裏に分離・独立し誕生した。西はドイツ、北はポーランド、東はスロヴァキア、南はオーストリアの4カ国に囲まれており、日本の北海

道よりもやや小さな国土に、東京都よりやや少ない人口、約1,050万人が住む。首都はプラハ、公用語はチェコ語である。国の中部から西部は「ボヘミア地方」、中部より東南部は「モラヴィア地方」とよばれ、クラシック音楽、ガラス工芸、ビールやプラハのユニークな建築群を通して知る人も多い。日本とチェコの関係は、旧チェコスロヴァキア時代から良好で、2017年には日本との国交回復60周年を迎えた。姉妹都市締結にも熱心で、高崎市のほかにも草津町とカルロヴィ・ヴァリ市、京都市とプラハ市が姉妹都市となっている。

●チェコの藍染め

チェコでは、18世紀後半頃より麻や綿織物に木型で糊を置き、藍で染めて様々な文様を施すようになった。藍は、遠くアジアから運ばれてきたもので、濃密な藍色に精緻な白い模様が特徴的である。民族衣装の一部として、おもに女性のスカートやエプロン、ヘッドカチーフ、また羽根布団のカバーやクッションに仕立てられ、庶民に愛用された。文様には身近な動植物を図案化したものが多い。19世紀後半には最盛期を迎えるが、その後は衰退していった。2018年にはチェコを含むヨーロッパ5カ国に残る防染ブロックプリントと藍染めの技術がユネスコ無形文化遺産に登録され、チェコ国内では藍染めに対する関心が再び高まっている。

●執筆者・小川里枝

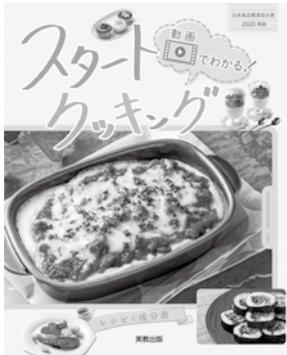
チェコ工芸研究家、ヴィオルカ主宰。成城大学大学院文学研究科美学美術史専攻博士課程前期修了。高崎市美術館で「ボヘミアガラスの100年展」を学芸員として担当したあと4年間プラハに滞在。帰国後チェコ共和国大使館勤務、チェコ美術の展覧会の開催準備、主にカタログの翻訳に携わった。共著に『チェコを知るための60章』（2024年明石書店）訳書に絵本『藍染めのアポレンカ』（2023年求龍堂）がある。

<https://www.violka.jp/>



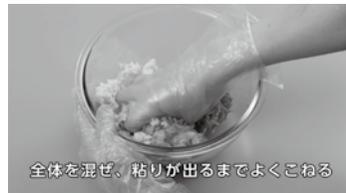
新刊教材のご案内

動画でわかる！ スタートクッキング レシピ+成分表



AB判/112ページ/定価770円(税込)

- ・全レシピ動画付き！
- ・「家庭基礎」「家庭総合」「フードデザイン」の調理実習に役立つレシピが満載です。
- ・学習者用デジタル教材（Lentrance版）もご用意します。



★主な特色

《すべてのレシピに動画付き！（全66点）》

⇒調理工程を動画で確認できます。失敗しやすいポイントやコツなどもていねいに解説しました。

《調理実験も豊富に掲載》

⇒「りんごの褐変を抑える方法」「豆腐のすだちを防ぐ方法」などの調理実験を掲載。レシピに関連した調理の科学理論をおさえることができる「実験・サイエンス」のコーナーも設けました。

《充実のQRコンテンツ》

⇒レシピ動画以外にも、「栄養計算をしてみよう！」（アプリ）や実験動画7点をご用意しました。

※動画およびデジタルコンテンツは、2025年2月リリース予定です。

《本書掲載の食品を中心とした成分表も掲載》

★構成

調理の基本編

- ・野菜の切り方や魚のさばき方など、調理の基本テクニックを写真で掲載しています。
- ・QRコードから、調理の基本に関する45本の動画を見ることができます。

レシピ編

- ・基本から応用までバランスのよい実習題材にしました。
- ・人気の韓国料理やデザートなど、新しいレシピも豊富に掲載しています。

食品成分表編

- ・らくらく栄養計算ができるアプリ「栄養計算をしてみよう！」をご用意します。
- ・レシピ編で扱う食品を中心に316品目掲載しています。
- ・「フードデザイン」に掲載の調理実習で扱う食品も一部を除き掲載しています。

© 編修・発行 実教出版株式会社 代表者 小田良次

通巻88号
2024年9月25日発行

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5
TEL. 03-3238-7777 <https://www.jikkyo.co.jp/>